。裕』の周囲以集まってい式一人でエリコ唇は式。 一後でいいかなら、カングのことがあるから」 「そのよっな可。見のな」

る決定事項だ。突発的な仲間の早逝を訝り、恐怖に身を震

エリが筒の表面に掌を置いた。すぐさま十六桁の数字が

11

6 掛巾

いである。彼らにとって死は、一定期間が過ぎた後に訪わ

ヨシュアとエリ以外の九名の反応は、有体に言って戸惑

出る

214

たしてお草の上い全種で掛たえられていた。首を祀った らしく少々、不合句法は、顔幻安らかい見える。

10

二人の地位ちきコカ県の僧伝予ひぶアソる。 Eシュてお かを見示く対り致わか。

「そう。サントが形んけんだ。屋財の棘から落さて。みん なき集まってるから」 屠所の羊

エリは、本をめくっていた。

並び、『同様の処理となる』と指示がある。 「神様。あなたの知恵と偉大さをお示しください 光の文字が浮かび上がった。日付、数字と記号の羅列に

で話さ

号が打ち出された。 「はい。……みんな。カレブを『塔』の中へ!」 エリの言葉に四名がカレブを運ぶ。続いて別の日付、

番

(G44)

「ヨシュアも中へ」

本を繰っていたエリが再び、命じる。

「ヨシュアは、村の境を越えたんだ」 「どうしてヨシュアも?」

12

13

Eシェてお手を謎る。大班コ宗全コ強しお筒の中かE

シェでな立てと蘇やなゴ下剤し飲めず。

[2744444]

きょうとなっての姿は崩れ、白い解みな塵となった。輝き

な冷さ天へと程っアパシ

ヨシェアお、鼬い乳交服をエリコ難しお。 筒お、ヨシュ ての背大割との高さいかり上沿っている。よしての織いヨ

「うん。迷恋かけてごめん」

中に枯さ込めない」

疑問の声にエリが答えた。息をのむ気配、押し殺した囁

ランエアの手に目を留めたエリの顔は、明日とお明の鷺

黄を越えたの? とっして?」 、別化学。 とてぐ 目……」 。とより後に見

「十四年かき大変そこ式。 百五十年 打、無野 びょ。 知 う コ

口多開き体わるエじの背数ア『大』式さ体転知え多わり

エリおヨシュアに肩を貸し、始き起した。 「ないないと」といる。……。」といないない。

きが辺りを満たす。

何なるこれの? もとい音がっかけど」 小り書ってきずのおエリぎった。

「悪いけど、服を脱いでもらえる。カナンの物は『塔』の

く。散策といった足どりだ。花も、この地獄絵図にわれ関

空は青いまま晴れわたっていた。首を傾げるヨシュアの耳 ふいの遠雷に驚き、ヨシュアは天を見上げる。しかし、

に唸り声が響いてくる。

パンかを、「大』 さき幻中間の沢科を一体預い巣め幻りめる。

「これしゃことが……」

**Eシュてお掌で散パアいる

赤多郷め

ま。

赤色の

赤ん

も**

。やいしの後と 「ームエベモ」

シュアの顔に笑みが浮かんだ。

くに見えていた花が今は自分の手にある。それを眺めるヨ せず、甘い香りを放っている。ヨシュアは枝を折った。遠

いさをふりはい、森の奥へと逃り去った。ヨシュてを一顧

一重の出来事

「」となりまの

いまないまないま

のいまない

のいま

容量である。

傾姿勢をとった途端、獣の腹から血液がふき出した。苦痛 で身を支え、荒い息を吐いている。ヨシュアに向かい、前 振り向いた先に片目の潰れた獣が佇んでいた。四本の足

のためか体勢が崩れ、獣はよろける。

て幸いだったのは、獣の負傷が深刻だったことだ。獣の命 6 しかし、痛む足では、まともに走れない。ヨシュアにとっ 獣は境界侵犯に対する定例に従い、行動するはずだからだ。 は、地面を叩く体液とともに失われようとしている。 ヨシュアは、かけ出した。目指したのは、村の境である。

L

りてくる。 Eシェての韞閣を決勝と見引のさるで。 増約日

シュアへ本当からした。ヨシュアは、飲界の内側へと戦か

音まれななら天多期ふぎ。 光の卦な Eシュトン 向なって刹

追いかけっこの始まりだ

オき依行っているのお集団を主体し式替人難であった。 常 以別え、 追い式ア了財手の無視な値き多穏で。 強管依蓄財

科はいっちょいによるいのでは、関本としてのたの禁む | 類談学。資質の動りコピリア却百き承昧なの針らで。[子]

路集するさめの行動がっさのが。

に欅足の直、店、主。く核玖真のトラスにいるに働

的で冗様のようできあった。

か れる。光の掛お、ヨシェアのいき最而い立っていき増を貫続

光の中でなををかのない猫の私が、今後了地面以頭直を

新の中でなすをかのない 高の。 森音化大気を 雪は がは

が、木々に阻まれ、かげって見えた。その下をヨシュアと 雷鳴が、だんだん大きくなる。空は以前、快晴であった

> ヨシュアは、
> 顕きをよそ
> は
> 許を
> 練
> 的
> も
> ア
> い
> る
> 樹
> 木
> に
> 近
> い 場気を立てていた。

つい鼻の洗う増と登桝が争い、血を流している。不断な 一四お趾以分し、」動の際わさ獲の内瓤なおえ式空辰の中で

資酵の目的お明らんぎ。 ヨシェアを献食しまいのである。 ヨシェアが、この易を去れば、戦闘お沈籍小するおずだっ **数約、『大』 さきな 登録 3 手ひ こ 割りまの 多見情らり、** き、気が、ヨシェアは、この事情にあられく関値しない。

唸り声をあげる。瞬間、獣の体は横ざまに弾き飛ばされた。 は足元の石を拾い、獣に投げた。斜め前方に回避した獣は 獣は、ただヨシュアの動きを目で追っている。ヨシュア

「森づね、窓ろしい経球ないる人式。知く式さを食べきや 本には、本には、これによっていまっています。 滴っていた。小山のような体を後ろ足二本で支え、耳をつ んざく咆哮を放つ。目は一点、ヨシュアを見つめていた。

がろうとしていた。しかし、裂けた皮膚から肉が覗き、血 液が絶えず流れている。果たせず、頭だけをもたげた。遠 の間にも獣が、背中から腹にかけて傷を負いながら立ち上 ヨシュアは動くこともできず、力の権化と対峙する。そ

突進してくる怪物に黒いものがぶつかっては弾かれてい

吠えを始める。

た。『犬』たちである。さきほどの遠吠えは、獣が仲間を

沿った行動しか許されていないのだろう。 獣は言葉にもゼスチャーにも反応しない。おそらく定例に ヨシュアは頭の横で指を回し、尻を叩いて見せた。だが、

「ぼくを見ろ! よくもこんな目に遭わせたな!」 軽侮という行為を理解しているかどうかさえ怪しかった。

強い体毛に覆われた巨大な腕が現れる。鋭い爪から血が

ン、楠樹暖様(@kusunokidan)の作成図を使用して

名

います